目　次

日新斎（じっしんさい）……9
岩剣城（いわつるぎ）……24
蒲生（かもう）城……45
北村城……45
帖佐（ちょうさ）城……54
松坂城……57
再び松坂城……62
菱刈（ひしかり）陣……65

菱刈合戦……70
木崎原合戦……95
高城合戦……113
相良義陽……139
沖田畷の戦い……150
戸次川合戦……175
根白坂……200
唐入り……246
関ヶ原……334
参考文献……409

菱刈合戦

永禄三年に入ると、日向の伊東義祐が飫肥城攻めを本格化してきたので、この地を守る豊州島津家の島津忠親は、本家に援軍を要請してきた。

貴久は義弘を豊州家に養子に出すことを決心した。

（義弘が飫肥に入ったなら、義祐もそう易々と飫肥城に攻め込めまい）

これで伊東の侵攻はひとまず下火になったが、永禄四年になると、大隅半島の肝付兼続が島津に叛旗を翻した。

兼続は福山の廻城を襲い、それを救おうとして貴久の弟・忠将が討死した。

永禄五年には、日向真幸院を治める北原氏の当主・北原兼守が亡くなると、伊東が真幸院に侵攻しようとしたので、島津は肥後の相良と組んで、伊東の西侵に対抗した。

永禄七年になると、伊東の真幸院の侵攻が激しくなったので、義弘を飫肥から連れ

戻して真幸院の飯野城を守らせた。

その結果、三山から東は伊東の、飯野城より西は島津の勢力となり、相良と島津との協調を仲介した菱刈重猛に飯野の南西にある横川を与えた。

永禄九年には重猛が亡くなり、嫡男・重広はまだ五歳の若さだったので、叔父・菱刈隆秋が菱刈本家の舵取りを任された。

重猛は大隅合戦以降、島津に恭順の姿勢を取り続けてきたが、隆秋は島津の勢力が北薩に伸びることを恐れ伊東と同調するようになり、大口・羽月・山野・曾木・馬越・湯之尾・平出水・横川らの城が一斉に叛旗を翻したので、家督を貴久から譲られた義久は、ついに菱刈を攻めることを決意した。

（大隅半島の肝付兼続、それに日向の伊東という大敵に比べれば、菱刈の方がまだ与し易い相手だ。だが決して侮ることはできぬ）

菱刈氏が領有する菱刈平野は北には肥薩の国境を形作る連山が聳え、川内川が貫流する肥沃なところで、南九州でも有数の穀倉地帯である。

（伊東を攻めると偽って、島津が集め得る全勢力をつぎ込もう）

栗野まで軍を進めた貴久、義久父子は、ここから進路を西に取り、湯之尾を経由して馬越に向かう。

義弘は飯野から般若寺越えで馬越に出陣する。

馬越城は栗野から大口を経て水俣に達する街道沿いにあり、川内川の北東にあるシラス台地上に築かれた城で、井手籠重之が三百の手勢で守っていた。

島津方は大口城に備えて貴久七千が馬越城の北西の陣之尾に、義久は八千で大口城の東の諏訪山に布陣し、飯野から到着した義弘は西の稲荷山に陣を構えた。

先鋒は義弘隊である

夜、攻撃のために馬越城の形勢を窺っていると、城の方向にしきりと松明の明かりが動く。

「敵がわれらの動きを察して、攻め込んでくるぞ」

兵たちは菱刈軍の夜襲を恐れ、動揺が広がった。

「よく見よ。あれは敵の松明ではないぞ。黄色く光っておるであろう。あれは稲荷大明神様のよきお告げだ。稲荷大明神様がこの戦さの勝利を引き受けて下されたぞ」

義弘の大声に鼓舞された兵たちの表情に、安堵の色が広がった。

島津氏は稲荷大明神を守護神として崇敬しており、その謂われは古く、島津初代の忠久まで遡る。

彼は源頼朝の子だと信じられており、比企能員の妹である丹後局が頼朝の子・忠

久を妊(はら)んだ。
そのことが頼朝の正妻・政子に知れると、丹波局は政子を恐れて摂津住吉へ逃れるが、彼女は住吉神社の境内で産気づいた。
その時出産を助けたのが狐だと言われており、以来狐は代々島津家の守り神なのである。
貴久の軍が陣之尾から東の徳辺(とくべ)に移るのを待って、義弘隊は城下の屋敷に火を放ち、喚声をあげながら北西から馬越城を攻めた。
城兵は矢や石を投げて侵入を防ごうとするが、島津の大軍は城門を打ち破り壁を乗り越えて城内に入ろうとした。
大口や人吉(ひとよし)から菱刈と相良の援軍がやってくるが、馬越城の南に布陣する義久隊が彼らを寄せつけない。
「手向かう者は斬れ。降参する者は許す」
義弘は城内の兵に降参を呼びかけるが、井手籠兵たちは、「包囲している島津が許す筈はない」と覚悟して、義弘隊に討ちかかってきた。
新納忠元の働きは一際目を引いた。
敵の槍衾の中に突き入ると、脚や腕に無数の矢が刺さるのも構わずに十人を超す敵

の首をあげた。
返り血を浴びた忠元は、まるで赤鬼のような形相で敵を追う。
「そう無理をするな。老体はでしゃばらずに家臣たちにも手柄を立てさせてやれ」
「何の、まだまだ若い者には負けませぬわ」
四十二歳の忠元は義弘の冷やかしを意に介さない。
島津軍の猛攻の前に、さすがの馬越城も僅か二日で落ちてしまい、勝ち鬨が菱刈平野に響いた。
この激しい島津軍の戦さぶりに、菱刈方は本拠の太良(たら)城をはじめ曾木・湯之尾・羽月・平出水・青木・市山(いちやま)・横川の八城を戦うことなく放棄して、市山川を渡河して大口城に籠もった。
（大口城は肥後の人吉に近く、相良の援軍も得やすいと思ったのだろう）
義久は菱刈の意外な手応えのなさに驚いたが、気を抜かなかった。
大口城は大口盆地が広がる「城山」と呼ばれる高さ五十メートルほどの台地の上にあり、牛山城とも呼ばれた。
城の西側を流れる羽月川と東を流れる市山川が大口城を左右から挟むようにして、南の川内川に注ぎ込む。

城の東が大手口で、山の周囲は土塁と空堀で守られており、守り易く攻め難い。
島津軍は菱刈が放棄した城に配下の者を入れたため、大口城は主力軍が籠もる馬越城と周辺の城に囲まれた格好になった。
薩州島津家の義虎も出水から一千の兵を連れて出張っており、羽月・山野・平出水の三城を守る。
大口城から市山川を隔てた市山城を預かっていた市来家利・伊集院久慶・平田加賀守らが大口城偵察のため、数十人の兵を連れて市山川を渡るが、大口城は高台にあるため、周辺の城兵の動きが手に取るようにわかる。
彼らはあっという間にとり囲まれ、討ち取られてしまったので、市山城は城代のいない城となってしまった。
「市山城は大口城に近く、重要な城だ。義弘には大口城の南を固めてもらわねばならぬので、市山城は忠元に任す」
義久の言葉を耳にすると忠元は感動した。
初めて城を任される身分になれたのだ。
「大口城を落とした暁には、お主に大口城を預かってもらいたい」
義久は忠元への信頼をきっぱりと口にした。